

祝！ウィーン・リング・アンサンブル 来日30回 これまでの来日を振り返って

Ⓐ男 1年の始まりは？

Ⓑ子 ウィーン・リング・アンサンブル！

Ⓐ (笑)。すっかり音楽ファンにとって合言葉だね。

Ⓑ お正月三が日を過ぎて、やっぱりウィーン・リング・アンサンブル(以下リング)のやる、優雅で活気あるワルツやポルカを聴かなきゃ1年が始まらないわ。

Ⓐ そんなリングも来日30回。

Ⓑ 早いものねえ。私は最初の来日の頃って聴いてないのよ。A男くん、せっかくだからこの機会に30回を振り返ってみない？

Ⓐ OK。そうしよう！

初来日は1991年。まずね、この時は1月じゃなくて3月だった。そして東京公演はサントリーホールではなく、約500席のカザルスホールで、その代わり4回公演。あと大阪のいずみホールと、阪南のサラダホールだったな。

そしてその時のメンバーはこちら。



※Photoは当時のプログラム冊子より

ヴァイオリン — ライナー・キュッヒル
エクハルト・ザイフェルト

ヴィオラ — ハインリヒ・コル

チェロ — フランツ・バルトロメイ

コントラバス — アロイス・ポッシュ

フルート — ギュンター・フォーグルマイル

クラリネット — ペーター・シュミードル
ヨハン・ヒントラー

ホルン — ウォルフガング・ヴラダー

Ⓑ あれ？もちろん今とは違うとはいえ、私の思ってたメンバーと違う…。

Ⓐ うん。そもそもね、リングの結成がいつか？というのが曖昧で、1980年代後半にキュッヒルやシュミードルたちウィーン・フィルの面々が、シュトラウス一家やランナー、ツィーラーらのワルツ、ポルカには知られざる作品もたくさんあるから、それらを紹介するために録音したい、という企画を立ち上げたんだ。それで、言ってみれば初め集まつたのは録音用の臨時編成メンバー。首席たちばっかりだけどね。そしてとりあえず名前どうする？ってことで、誰からともなく、我々ウィーンの由緒あるリング通りの名を冠しようじゃないか、と。

その録音を日本のPLATSというレコード会社が、わが国でもぜひ！とリリースすることになった。これを聴いた梶本音楽事務所(現・KAJIMOTO)がこの企画で来日公演をやったら面白いんじゃない?と、バタバタと色々なことが決まっていき、1991年に初来日。もっとも、その当時の録音メンバーから、ヴィオラのゲツツェルがコルに代わり、色んな事情でシュルツやヘーゲナーが来られなくなって代役になったりしたんだけどね。

Ⓑ 1991年といえば、ウィーン・フィル(以下VPO)の元旦ニューイヤーコンサートのNHKでの生中継が、年々ファン恒例の人気番組になってきた頃(あの頃は時々放送が途切れたりした)…1984年にカラヤン、89、92年にカルロス・クライバーが指揮していた頃だし、みんなこのニューイヤーコンサート、ナマで聴きたいなあ、と思っていたものね。

Ⓐ 僕もまさにそうだったよ。そしてリングは9人編成だけど首席奏者たちだし、聴いてみたらフル・オーケストラを彷彿とさせる豊潤な響きの演奏会となつたわけ。まるでVPOのエッセンスに接しているような。

Ⓑ で、毎年やろうと。

- Ⓐ いや、すぐにそうなったわけじゃないんだ。この初来日公演、実は集客もよくなかったしね。でも我々スタッフの間では、これは何しろ上質だし、イケるんじゃない?やろうよ!という気運もあり、東京公演に関しては都民銀行がスポンサーになるからせひサントリーホールで、ということになり、1年置いて1993年に再来日が決まった。



1993年来日時のプログラム表紙

- Ⓑ よかったわー。そこでやめてたら今日までのこの伝統はないもの。そして早くもここで第一次ベストメンバー勢揃いね。

ヴァイオリン — ライナー・キュッヒル
エクハルト・ザイフェルト
ヴィオラ — ハインリヒ・コル
チェロ — ゲアハルト・イーベラー
コントラバス — アロイス・ポッシュ
フルート — ウォルフガング・シュルツ
クラリネット — ペーター・シュミードル
ヨハン・ヒントラー
ホルン — ギュンター・ヘーグナー

- Ⓐ というわけで、このメンバーで固定され、毎年お正月に日本公演が行われるようになった。皆、元旦のVPOニューイヤーコンサートが終わると家に帰って荷物パッキングをして空港へ!と。

- Ⓑ 私たちには嬉しいけど、本人たちバタバタで大変そう。

- Ⓐ そうだね。でも皆さん、それが楽しいんだって口揃えて言うよ。演奏も楽しいしね。

- Ⓑ でも私知ってるわ。このリングの公演の楽しさを支えてるのは、もちろん彼らVPOメンバーの最高の音楽性ゆえだけど、相當に厳しい練習してるって。特にキュッヒルさんの妥協なきダメ出しはすごいって。

- Ⓐ あんな優雅な曲やってるのにニコリともしないし、皆で下手袖に引っ込むと、何を言っているのかドイツ語でわからないけど、いつもガミガミ…「こんなんじゃダメだ」って感じのことを言ってるもんな。で、翌日の公演前のリハーサルは前日の問題だったところを集中練習。

- Ⓑ でも、そのおかげでの質の高さが保てるのよ。私、90年代の終わりくらいかなあ…アンコールの「美しく青きドナウ」で、最初のキュッヒル、ザイフェルトらのひそやかな弦楽器のトレモロに、そのはるか向こうから聴こえてくるようなヘーグナーの「ララララ~」ってまるやかなホルンの音色が響き、その後にシュルツ、シュミードルらの木管楽器がそっと後打ちの音を置く。この一連の呼吸がまるで自然現象のように、あたかも一人で奏しているみたいに聴こえたのは初めてのことだった。これがJ.シュトラウスの音楽であり、VPOという最高の文化の体現だと、心から感動したのよ。

- Ⓐ 僕も色々な曲でそんな思いをしたなあ。「こうもり」や「メリーワイドウ」のオペラ・メドレーが、喜びも悲しみも甘く切なく、極上の酒の香りみたいな空気となってホールに漂うんだ…。
ところで今、「美しく青きドナウ」の話が出たけどね。あれと「ラデソキー行進曲」、今は本家VPOと同じく慣例のアンコールとなってるけどね、初期はなかったんだ。

- Ⓑ あれ? そうだっけ?

- Ⓐ キュッヒルさんはじめ、メンバーの一部が日本では同じことやりたくないって反対してたんだよ。でも、やっぱり、せっかくVPOニューイヤーの日本版をやるんだったら、お客様も絶対それ楽しみにしてるし、やっていけないことはないんじゃない?って当時の梶本音楽事務所の副社長やディレクターが説得して、何年からだっけな?今はこの通り、お約束のアンコールとなった。

- Ⓑ よかったわ。せひあればやってほしいもの。

A さてさてこうしてこのメンバーで20年以上不動で、すっかり音楽ファンにとってお正月の風物詩ともなったわけなんだけれど、どうしたって人間、歳には勝てない。ちょうど東日本大震災があった2011年くらいから変化が出てくる。

B 2012年にコントラバスがポッシュからミヒャエル・ブラデラーに代わり、クラリネットのヒントラーがシュテファン・ノイバウアーになったわね。



ブラデラー



ノイバウナー

A ヒントラーは翌13年からまた戻るんだけど、コントラバスが交代ってなかなか大きくて。ベースのリズム感…個人差によるちょっとしたものとはいえ、ポッシュとブラデラーだと違っていてね、そうすると全体の音楽の空気にも少々の変化が。

B 私もあのとき、そう思った。でも今となると問題なく馴染んでるよね。やっぱり何でも時間が必要なのよ。

2013年にはさらにメンバーが多く動いたわね。

ヴァイオリンのザイフェルトがダニエル・フロシャウアーに、チェロのイーベラーがロベルト・ナジに、ホルンのヘーグナーが引退してウォルフガング・トムベックになった。



フロシャウナー



ナジ



トムベック

A ここで弦楽器は半分以上変わり、響きが若返った。

B その年にはショックなことが起こったわ。リングのみならずVPOの看板フルートだったシュルツさんが亡くなられて。ステージ上で小芝居してくれたり、ムード作りの人でもあったのに。

B 僕も悲しかったよ。あの時は本当に。その代わりに入ったのが若きVPOのエース、カール=ハインツ・シュルツだった。タイプは違うけどシュルツさんに勝るとも劣らず、べらぼうに上手かった。



シュルツ

B 新生リングの象徴のような感じがしたわ。

A だからこの頃はリングの過渡期だよね。そして昨年2019年にはキュッヒルや亡きシュルツとともにVPO、リングを支えた名手シュミードルが引退、若いダニエル・オッテンザマーが入り、ホルンのトムベックはもう一人のベテラン首席、ロナルド・ヤネシツに代わった。



オッテンザマー



ヤネシツ

B これでいよいよ第2期リングの完成型なのかしら。

A 多分。いや、そうだと思う。

B ベテラン、中堅、若手…いいバランスね。社会もこうありたいわ(笑) 管楽器が若手のエースたちだと、やっぱり響きの感じがシャープになるわね。

A そうだなあ。でもキュッヒル…彼は2016年にVPOを引退しているんだけど、リングは自分がやれる限り続ける、って言っているし、聴いていても、響きを作る、音楽を創る原動力は明らかにキュッヒルだから、響きが時代とともにアップデートされていても、核の部分は変わらないよね。VPOの奥深く、柔らかい響きのエッセンスは。

B そう願いたいわ。変わるものと変わらないもののバランス。お正月はこれからも変わらずリングのフルツ、ポルカで酔えますよう…